

伝統的青年集団の再編

——秋田県北秋田郡上小阿仁村小沢田の事例——

新 井 眞 人

1. はじめに

青年会やグループ・サークルなどの近代青年集団のほかに、伝統的青年集団である「若者組」の末裔が、現在もなお全国各地の村落に点在している⁽¹⁾。

若者組の起源は、藩政期あるいはそれよりも昔に遡れるほど古い⁽²⁾。若者組は、村落共同体の維持・存続に不可欠な役割を果たしたと同時に、重要な人間形成の場でもあった。佐藤守も指摘しているように、若者組は村落内における各種の労働、消防・夜警、警察、葬式などの役割分担、入り会い林野や地先漁場の管理統制、氏神祭典行事の下請け、盆踊りなどで重要な役割を果たし、同時にこれらの諸活動を通じて、村落の伝統的行動様式の総体（文化）を引き継いできたからである⁽³⁾。

このような若者組の研究が教育社会学の分野で精力的になされたのは、昭和30年頃から同45年頃にかけてであった⁽⁴⁾。それは、伝統的青年集団の消滅化、官製的青年団に代わる青年会の組織化、近代的な青年のグループ・サークルの簇生が同時に進行した時代であった。変動の激しい社会の中で多様化した青年と青年集団の在り方が、模索されていた時代でもあった。この頃、教育社会学の分野でなされた主要な若者組の研究は、つぎの三つである。

第一は、竹内利美や江馬成也に代表される農村社会学的調査から生まれた研究。たとえば「東北村落の年序組織」の究明に焦点をあてた研究が、それである⁽⁵⁾。

第二は、矢野峻をリーダーとして展開した道德教育の教育社会学的調査から生まれた研究。たとえば「年齢階梯組織とその教育機能」の究明に力点を置いた研究（小林文人分担）が、それである⁽⁶⁾。

そして第三は、「伝統的青年集団の近代化過程」を実証的に究明した佐藤守の歴史社会学的研究が、それである⁽⁷⁾。

いずれの研究も民俗学の分野で開拓されてきた研究成果を踏まえ、それぞれの関心

秋 田 大 学

伝統的青年集団の再編

や問題意識に基づいて研究を展開したが、つぎの点では一致していた。たとえば村落に見られた年齢階梯集団の究明、その一環をなす伝統的青年集団の構造・機能、およびそれらの変容過程の究明がそれである。同時に、そこでは新しい青年集団の探究もなされていたといえてよい。

さらに研究方法上の点でも共通点があった。村落の社会構造の違い（同族的か組的か）、村落の経済的基盤の違い（山間部農村か平場農村か、あるいは漁村か）などを考慮し、それぞれ異なる調査対象地の事例を比較研究していることである。また、それぞれの事例研究は、質問紙調査を部分的に併用することもあるが、大部分は面接による伝承や体験の聴き取り、史料や統計資料、その他の記録類・物件等の収集に依存している。

本研究の目的や方法は、先行研究のそれと重なる点も多いが、つぎのような特徴がある。

第一は、研究目的を伝統的青年集団の再編過程の究明に置いている。一つは村落の階層分化に伴う伝統的青年集団の組織分化とその再統合、いま一つは伝統的青年集団と官製の青年団の並存重複、そしてもう一つは伝統的青年集団の消滅とその再生。以上のそれぞれが、事例に即して実証的に究明される。

第二に、研究方法であるが、本研究は複数事例の比較研究ではなく、一事例の歴史社会学的研究である。しかし、面接調査の実施をはじめ、民俗研究者等がなした先行研究の吟味、史料・統計資料・記録などから得られる情報の収集などもし、いろいろな角度から主題にアプローチした。とはいえ、得られた情報の多くは断片的で、時に矛盾さえ見られ、判断に苦慮したところもある。

なお、本研究は一事例研究の形式を取っているが、元々は複数事例の比較研究を企図した共同研究の一環をなすものである⁽⁸⁾。

2. 上小阿仁村と小沢田若勢団

調査対象地の上小阿仁村は、明治22年の「市制・町村制」の実施により、九カ村（24部落）が統合してでき、そのまま今日に至っている山間村である。南北に細長い地形で、四方を山に囲まれ、総面積（257km²）の約95%が山林原野である。村の中央を小阿仁川が流れ、これに沿って20集落（昭和59年現在）が散在する。

人口と戸数の推移はつぎのようで、昭和35年以降の人口減少が著しい。明治5（1872）年3008人、479戸→昭和5（1930）年5126人、806戸→同35（1960）年6972人、1303戸→同45（1970）年5242人、1318戸→同59（1984）年4323人、1293戸。基幹産業は農林業であるが、有業者に占める農林業従事率は、つぎのように下降している。昭和25年（76.8%）→同40年（60.7%）→同55年（35.3%）。

この上小阿仁村のほとんどの部落には、かつて「ワカゼ」と呼ばれる青壮年層（15～42歳）の人々からなる「若勢団」が存在した。若勢団とは伝統的青年集団のこと

で、青壮年型の「若者組」の範疇に入る。それが、いまだに存続している部落もあるが、消滅した所も多い。本稿では藩政期から存在したが、昭和30年代初頭に消滅し、その後、昭和51年に再生した小沢田部落の若勢団について、その再編過程を事例に即して究明していくことになる。

3. (旧) 小沢田村の階層分化と若勢団の再編

『秋田風土記』（小阿仁の部）や『小阿仁風土記』によると、文化12（1815）年頃の小沢田村は、戸数45戸、人口232人、高152石9斗で、零細な水田耕作を中心とした山間村であった⁽⁹⁾。また小沢田村は、同族結合を母体とした村でもあった。たとえば明治時代の初め、56世帯のうち、中心勢力をなす姓氏は、田中（21）、伊藤（20）であり、残りは小林（7）、その他（8）である⁽¹⁰⁾。しかし、大地主はいなかった。

宮本常一の調査によれば、明治以前の小沢田村では、ワカゼを置いて直営生産を行っても、大体20町歩までであった。旧家は、もともと一軒だけ特別に大きく存在しようとするのではなく、本家の勢力よりやや劣る別家（分家）を何戸か出して、本家の支えにする傾向が強かった。しかるに、20町歩以上は別家を出して別家に経営させた。本家から出る次三男の別家は、本家の財産の三分の一以下をもらうのが普通であった。肝煎をしていた田中本家も、明治の初めまでは、20町歩程度の自作地主であった。本家の農業労働力は、ワカゼと称する常雇いの奉公人を主体とし、農繁期には、別家やワカゼ別家の手伝いに依存した⁽¹¹⁾。

このような小沢田村にも、すでに藩政期から若勢団が存在したようだ。小沢田村と隣接する大林の若勢団が、天保14（1843）年、「獅子踊」の最中に鎌沢の若勢連と一悶着あった⁽¹²⁾、と記録されているからである。

普通、若勢団には、各家々のワカゼとオヤギ（オヤキ）と称する上層農家に雇われて働く「住み込みワカゼ」の双方が加入していた。若勢団の部落内での位置は、惣代—伍長（組頭）—若勢団というつながりの中にあった。しかし、この若勢団はムラの階層分化が拡大する過程で再編されることになる。そのプロセスは、小沢田の場合、つぎのようである。

明治5（1872）年から土地売買が自由になると、田中本家（和一郎）は米の貸付けをやり、その抵当に土地を取り、小作地を増やした。明治時代の末には、和一郎の息子吉五郎は、40町歩の土地を持ち、さらに吉五郎の息子元久は、昭和19（1944）年に55町歩（75町歩ともいわれる）を所有するに至った。昭和19年現在で小沢田部落の水田所有状況をみると、50町歩以上（1戸）、10～5町歩（2戸）、3～1町歩（5戸）、1町歩～5反歩（6戸）、5～3反歩（2戸）、3～1反歩（10戸）、1反歩以下（23戸）、水田を持たない者（63戸）であった。そしてこのうち、同じ姓氏が10戸以上あるものを見ると、田中（58）、伊藤（34）、小林（11）となっている⁽¹³⁾。

以上からすれば、小沢田部落は、明治初頭から約70年間で戸数も約110戸と倍増し、

伝統的青年集団の再編

同時に田中本家の支配するところとなった。それは、小沢田部落において拡大していった階層分化の到達点でもあった。

このような階層分化の過程で、部落会の組織も変わる。明治24年に「伍長ヲ廃シ更ニ協議委員拾五名ヲ選挙スル事」になったが、同41年には、協議委員は5名と改められ、「部落ニ関スル一切ノ事」について議決権を所有することも成文化される⁽¹⁴⁾。

こうした変化は、若勢団の再編を伴ってもいた。明治30年頃、当時の村長田中吉五郎の従兄弟で、小沢田部落会の年番も務めた田中元治等が中心となり、「部落を振興させるためには、若者が協力しなければならない」ということで、部落内のワカゼ達を青年会第一部と青年会第二部とに再編した。第一部の構成員は、本家格や有力者の長男であった。また第二部の構成員は、小作人や零細な自作農の子弟、住み込みワカゼ、および有力者の家の次三男であった。このような若勢団の再編は、大林や沖田面などの他部落でもなされた。そこでは、小沢田で言うところの青年会第一部を若者団と呼び、同第二部を若勢団と称した。そして再編された若勢団と部落会との関係は、惣代（部落会長）—伍長（協議委員）—青年会第一部（若者団）—青年会第二部（若勢団）というつながりに変化した。それは、家族の人間関係に例えれば、戸主が伍長で、息子達が第二部（若勢団）で、その間に入って案配する舅が第一部（若者団）であった⁽¹⁵⁾。

小沢田部落の場合、若勢団の再編に際し、他部落とは異なる「青年会」という名称を使用しているが、これは明治28年、上小阿仁村が三学区に組織を試みた青年会とは違う。後者は、当時、全国的に見られた若連中の改革への動きの中から生まれ、一般青年の善導を目的としたものであり、組織も部落の枠を越えたものであったからだ。

以上からすれば、小沢田部落に見られた若勢団の青年会第一部と第二部への再編は、部落会組織の再編と同様、それは村落内の階層分化に対応した地主層のムラ支配策の一環でもあったと言えよう。

4. 若勢団と青年団の並存重複

(1) 青年団の発足と若勢団

若勢団の再編を推進した村内事情とは関係なく、その後も部落の枠を越えた官製の青年団体づくりが全国的潮流の中で進んだ。とくに日露戦争の終結した明治38年に、文部省普通学務局長通牒「青年團ニ関スル件」が出てから、青年団体づくりは新たに積極化していった。

上小阿仁村でも郡訓令に基づき、小沢田、沖田面、仏社の三学区に青年会ではなく校友会が設置された。校友会は各学校長が会長で、部落の有力者を後援者とした。その主な事業は、修養を目指すもの、風紀の改善を目指すものなどであった。夜学会や通俗講演会なども試みられた⁽¹⁶⁾。

こうした校友会は、先の官製の青年会と同様、一般青年の善導や伝統的青年集団の

改造を目指すものであり、「官製的特殊機能集団」としての青年団設置への布石となった。しかし、部落の枠を越える青年団体づくりは、伝統的青年集団が存続している限り、なかなか進展しなかったようだ。小沢田部落の場合も、若勢団の再編によってできた青年会は健在であり、それは困難なことであったと思われる。

たとえば明治42年頃に若勢団（青年会第二部）に加入した小沢田部落の K. K. 氏（明治28年生）によれば、当時の青年会第二部は、つぎのようであった⁽¹⁷⁾。

- ① 加入年齢は15歳で、脱退年齢は42歳。
- ② 組織は、若勢頭1人、世話役2人で、あとは年功であった。
- ③ 宿はワカゼのいるいないにかかわらず、家の大きいところに頼んだ。
- ④ 若勢寄り合いは、用件によっては昼夜の別はなかった。寄り合いの連絡は、加入したてのワカゼの仕事であった。寄り合いに30分程遅れると、罰金として20銭を徴収された。
- ⑤ 主な活動は、部落有林野の監督、護岸工事、開墾、獅子踊、相撲大会（七倉神社の祭典余興）などであった。

また、「小沢田部落維持規則」（明治41年4月7日制定）の次の二カ条も、部落有林野の監督や原野の取締りに関して、若勢が部落から特に期待されていたことを物語っている。

第五条 郷林ノ保護ハ従来ノ通若勢ヲ以テ監督セシム若シ犯人ヲ検挙シタル者アル時ハ賞金壹円ヲ与フナリ

第六条 原野取締ハ第5条ト同一ナルモ一定ノ場処除クノ外ハ採取従来ノ通トス
ところで、明治38年頃から積極化した内務・文部両省の青年団体指導は、大正4年の両省次官通牒「青年團體ニ關スル件」が出て拍車がかかり、ナショナリズムが高揚していく過程で本格化していく。秋田県でも大正5（1916）年に「青年團施設要項」⁽¹⁸⁾が定められ、大正7年にはすでに329の青年団が存在した⁽¹⁹⁾。青年会づくりや校友会の設置に腐心してきた上小阿仁村は、こうした時代の風潮の中で、大正5年、上小阿仁村青年団を組織した。小沢田、沖田面、仏社の三学区に支団を置き、各学校長を支団長とした。そして団長には村長になった。上小阿仁村青年団は、部落の枠を越え、さらに学区を越え、村の青年を一つに組織するものであった。さらに大正14（1925）年に、大日本連合青年団が発足し、青年団の全国組織が確立すると、小沢田青年団も上小阿仁村青年団支部としてその末端に位置することになる。

したがって青年団の活動も、修養を目指すものだけでなく、交流や親睦を深めたり、村づくりを意識させるものなど、いろいろであった。村の枠を越えた郡レベルの運動会も開催された。たとえば昭和2年度「村会会議録」によれば、大正15年の上小阿仁村青年団は、250人の団員（多くは25歳以下）からなり、つぎのような活動をしていた。

3月28日 惣会ヲ兼ネ模擬村会開催 出席者約二百人

6月22日 春季運動会ヲ開催ス 出席者約六十人

8月15日 修養会開催 出席者五十人

8月16日 郡聯合運動会出席者選手互選

9月16日 郡聯合運動会 出席人員四十人

このようにして、青年団は部落や村の枠にとらわれずに外へ開かれ、最終的には「皇国」志向を期待されていた。それは若勢団と対照的である。若勢団は、内部自閉的な部落組織の一環をなすもので、家頭（戸主）になるまでの若勢が所属し、ここでは「部落」志向が強く期待されていたからである。25歳以下のワカゼの場合、若勢団と青年団の双方の成員であったが、どちらかといえば「部落」志向的であった。たとえば若勢団の寄り合いや行事に遅刻や欠席をすると科料を取られたようだが、青年団についてはそういうことを耳にしない。先の青年団行事への出席率をみても、総会は約8割と高いが、運動会や修養会は約2割にすぎない⁽²⁰⁾。

このように「伝統的青年集団」が「官製的青年団」を圧倒した状態で、双方が並存重複したことは、上小阿仁村に限らず東北地方に広く見られた現象といえよう⁽²¹⁾。上小阿仁村の場合は、部落有林野も比較的多く、部落が若勢に期待するところが大きかったことも看過できない⁽²²⁾。

(2) 青年会第一部と第二部の統合

伝統的青年集団は、官製的青年団の確立後も、それと並存重複しつつ部落内で重要な役割を果たしていた。だが小沢田部落について言えば、伝統的青年集団（青年会）は内部矛盾をはらみ出していた。それは、つぎのようである。

かつてのムラの有力者の中には、その財を失い、その息子が年雇いになるケースも出てきていた。小沢田部落の場合、そうした家の息子でも所属は相変わらず青年会第一部であった。その結果、会長の選出も従来のように「持ち回り」できなくなった。また、第一部と第二部との関係にも無理が生じてきた。たとえば草相撲をやる場合に、「場所をつくれ」といって、第一部所属の「年雇い」が第二部のものに威張るときなどもあったからである。第二部が第一部の言うことをきかなくもなる。

こうした変化の中で、無力化した青年会第一部に代わり「青年同志会」が結成される。それは昭和の初めの頃であった。しかし、それもままならず、昭和7年頃、青年会第二部の若勢頭から伍長（部落協議委員）になったE. U. 氏（明治40年生）が、第二部と無力化した第一部を統合した⁽²³⁾。

このような伝統的青年集団の再編の背景には、部落内の階層構造の変化と、青年リーダーへの役割期待の変化があったと考えられる。第一に、田中本家が他を大きく離し「殿様」化し、部落は田中本家の支配するところとなってきた。それは青年会第一部の機能を内側から形骸化させたであろう。また第二に、青年会第一部あるいは第二部といった所属の違いにかかわらず、青年会指導者は部落の青年指導者としてよりも、学区や村の青年指導者としての役割を期待される傾向がなかったであろうか。

若勢団リーダーが青年団の役員を務めることもあったからである。

いずれにせよ、分化していた青年会が一本化されたことは、伝統的青年集団の存続と組織強化が目指されていたと理解できる。と同時に、伝統的青年集団の存続を困難にする状況が生起しつつあったとも考えられる。

5. 若勢団の消滅とその再生

(1) 若勢団の消滅

一方で再編されていく若勢団があったとすれば、他方で消滅していく若勢団もあった。戸数約10戸の中茂では、昭和初期に若勢団が消えた。沖田面でも、戦時中、若勢団が一時とだえた。しかし、若勢団の形骸化と消滅が本格化するのは戦後のことである⁽²⁴⁾。農地改革による地主制の解体、高度経済成長と青年の村外流出、在村青年のサラリーマン化、青年会・青年学級・自主サークルなどにみられる青年集団の多様化など、これらはいずれも若勢団の存続を脅かすものとなった。

第一に、農地改革で大地主が消えた。小作農の割合も、数年にして33.0%（昭和22年）から5.9%（同28年）へと下降した。「住み込みワカゼ」も、昭和28年には、上小阿仁村全体で22人に減った⁽²⁵⁾。そして農業センサスなどによれば、昭和35年には、5町歩以上の農家はゼロで、小作農の割合も3.4%となっている。ムラの権力構造も揺らぎ出し、若勢団の組織や若勢団と部落組織のつながりも弛緩していった。

小沢田の場合、田中本家の力は昭和30年代に、かなり衰えていったと思われる。それは、「本家礼」の消滅過程に象徴されている。1月2日には、ほとんどの部落で「本家礼」があった。別家の主人が手土産をもって本家に挨拶に行くと、本家では御馳走を作ってもてなした。小沢田にもこのしきたりがあった。だが、昭和38年頃から会費制となり、昭和43年頃にはやめてしまっている⁽²⁶⁾。ちなみに、戦後の田中本家からは、この40年間、村長は出ていない。

第二に、農作業の合理化と農業以外の働き口の増加は、何よりも農村青年の村外流出を可能にした。国勢調査によれば、上小阿仁村全体で10～14歳層の男子は、昭和25年に437人いた。だが15年後の昭和40年、25～29歳層の男子は260人しかいなかった。この間に、同世代の約40%のワカゼが村外に流出したといえる。青年の減少は、若勢団を組織できなくしたり、その活動を停滞させた。

第三は、在村青年のサラリーマン化。昭和25～40年の間に、村全体で、専業農家率は47%から6%へとドラスティックに下降し、男子有業者に占める農林業従事率も70%から56%へと下降した。20代男子の場合、農林業従事率はさらに低く、昭和40年現在で45%となっている。このことは、上小阿仁村にもサラリーマンが増えてきたことを物語る。青年の生活基盤や生活意識のズレも顕在化し、サラリーマン青年にとり、職場関係のつき合いは、かつてのワカゼ同士のつき合いに優先していく。

こうした変化と並行して、新たに青年会や青年学級あるいは自主的サークルなども

伝統的・青年集団の再編

誕生した。部落組織との結びつきが弛緩した若勢団の中には、新生青年会と一本化したり、自然消滅をするものも出てきた。小沢田部落の場合、若勢団は昭和32年頃に消滅した。それは、学区でなく部落を単位とした小沢田青年会が発足して、2～3年後のことであった。

(2) 小沢田青年会の発足と停滞

小沢田青年会は、昭和30年に発足した⁽²⁷⁾。加入年齢資格が15～30歳であったこともあり、若勢団の再生という印象すら与えた。だが、それは消滅しつつある若勢団に代わる青年集団の誕生というわけでもないし、戦前の青年団の再生でもなかった。それは「会則」に添付されている「小沢田青年会のちかい」をみても明らかである。その精神は、「部落」志向的でもないし、「皇国」志向的でもない。それは、一人一人の青年が自信をもち、道理を大切に、悩みがあれば相談し合い、よりよく生きることを願い、また同時に、働きがいのある、住みよい郷土社会の建設を理想としている。その活動も、文化的行事、体育的行事およびその他の行事からなるものであった。

他部落でも青年会が発足し、県連青一市町村連青一単位青年会という「三点系列」の末端に組織化されていく。だが、上小阿仁村の単青の中には、昭和30年代後半に消滅するところが出てくる。それは、昭和29年に新設された「青年学級」の歩みにも似ていた。

たとえば昭和36年当時、小沢田青年学級長をしていたK. I. 氏は、青年学級開催についての通知の中で、つぎのように語っている。

「さて登録制にした小沢田地区青年学級も、第五回目を迎えましたが、登録した学級生の皆さんが一向に集まりません。これでは何の為に登録制にしたのか、さっぱりその主旨がわかりません。確定した登録学級生とするために、今回は当日出席した人達に限り学級生と致しますので万障繰合せの上御出席下さい。」

その時の学級生名簿には、男子21名、女子14名が登録されている。これらは、小沢田部落在住者だけでなく、五反沢、福館、堂川の青年を含めての人数であった。

集まりの悪さは「青年学級」の行事内容がハードであったからではない。その内容は、日常生活に直結したものやレクリエーション的なものが、その中心をなしていたといってよい。上小阿仁村の高校進学率も、当時、男子32%、女子26%であった。

こうした「青年学級」の例からも分かるように、昭和36年頃から、単位青年会の消滅がみられた。単青が消え出すということは、青年会活動にとり赤信号であった。それは、青年団体活動の衰弱化を物語っていた。上小阿仁連合青年会は、県連合青年会にも所属していたが、昭和37年10月現在で、会費未納と記録されている⁽²⁸⁾。

こうした事態をみかねて、公民館のてこ入れもなされる。昭和37年の暮、各青年団体の役員が招集され、話し合いの結果、翌年に「上小阿仁村青年同志会」が発足した。しかし、1年半後には、上小阿仁連合青年会も七つの単青(200人)を動員し、昭和39年9月20日、役場会議室で大会を開催し、立ち直ろうとしていた⁽²⁹⁾。

ちなみに昭和40年10月21日に、上小阿仁村公民館で青年と面接した佐藤守のメモによると、事実まだ七部落に青年会は存在したが、会員数は1年間で半減していた。小沢田26人、沖田面24人、五反沢23人、羽立13人、仏社11人、大林11人、屋布8人、計116人であった。

小沢田青年会は、男子15人、女子11人から構成されていた。そしてつぎのような活動をしていた。

七倉神社奉納演芸会の主催、七夕の「とうろう」コンクール大会の主催、お盆の部落対抗球技大会（バスケットと野球）への参加、部落内の清掃奉仕、きりたんぽ会などの親睦会等が、主な活動であった。しかし、そこには、かつての「若勢団」にみられた「相撲」も「獅子踊」も「山林原野の監督」もない。

「相撲」は、昭和35年頃まで学区対抗で行われていたようであるが、その後と絶えている。「獅子踊」も戦後中断し、昭和40年に保存会ができたものの3年でと絶えてしまった⁽³⁰⁾。「山林原野の監督」「ムラの警備」なども、部落は青年に依存しなくなった。それらは部落の事業となっていた。小沢田部落の場合、昭和39年に改訂された「部落規約」の第4条（本部落の事業）は、それを明記している。

以上の変化は、若勢団の消滅につづき、青年会もその活動がさらに停滞することを予示していた。

(3) 小沢田若勢団の再生と地域づくり

① 過疎の進行

昭和40年以降の地域社会の変貌は、それまで以上のものであり、同46年には、上小阿仁村も過疎振興法による指定村となった。人口も、ピーク時の昭和35年に6972人を数えたが、同55年には4352人と急減した。村外流出は、青年層だけでなく、壮年層にも及んでいった。たとえば、15年間で同世代の約4割が村外流出した結果、昭和40年には260人と減少した25～29歳層（男子）の場合、つづく15年間で、さらにその約三分の一が流出している。それは、今までにない壮年層の村外流出といえる。いうまでもなく、若い世代の村外流出も急上昇した。たとえば昭和40年に、10～14歳層の男子は461人いたけれども、昭和55年までの15年間で、その約7割が村外に流出した。

高校進学率も、男子の場合、つぎのように上昇した。昭和35年（22%）→同45年（52%）→同55年（96%）と。村内には昭和46年に廃校となった米内沢高等学校上小阿仁分校（定時制）しかなかったから、高校進学も青年の村外流出に拍車をかけたであろう。

以上のような約30年間にわたるワカゼ層の村外流出は、昭和30年代末から徐々に過疎問題を顕在化させていった。児童数の減少による学校の統廃合問題、老人扶養の問題、部落の村内移転など、いろいろ出てきた。

ところで小沢田部落は、沖田面部落と並び村内の中心地に位置したので、昭和40年頃には戸数も157戸を数え、人口も昭和25～40年の間、トータルではほとんど不変で

伝統的青年集団の再編

あった。青年会や青年学級が、昭和30年代を何とか切り抜けてこられたのも、他部落に比べて相対的にまだ無理がきいたからであろう。しかし昭和40年代に入ってから、小沢田も沖田面も人口減少期に突入した。小沢田の男子人口は、昭和40～55年の間に、375人から242人へと減少し、同59年現在では228人である。減少人口の大半は、かつてのワカゼ層であった。

小沢田部落の壮年層も、地域の変貌に危惧し出す。伝統文化の保存、地域の活性化、世代間の交流などに、もっと力を入れる必要を感じるようになる。しかし、在村青年は高校生とサラリーマンがほとんどで、地域づくりの主体にはなり難い人ばかりになっていた。

② 新小沢田若勢団の誕生

村に残る者にとって、過疎対策は理論から実践の段階に入る必要があった。「むら興し」も具体化していく。たとえば昭和46年一杉花に養蚕組合設立、同48年一特産物栽培普及協議会発足、産業祭第1回開催、同49年一山羊飼育組合発足、農業総合センター発足、同50年一中茂にしめじ栽培工場竣工、同51年一キジ・ヤマドリ組合発足、淡水魚生産組合発足などと、新しい試みが展開されだした。

老人問題についても、生きがいづくりと特別養護老人ホームの建設で対応策が検討されていった。

残るは、廃れいく伝統文化（行事）の継承と保存、および連帯感にあふれた融和的人間関係づくりなどである。この面からの地域づくりを考えて、新たに設立されたのが小沢田若勢団であった。

小沢田若勢団の設立は、昭和51年7月のことである。その設立発起人は、M. T. 氏（41歳）を代表とする12人の「ワカゼ」であった。その中には、上小阿仁連合青年会会長のK. I. 氏も入っていた⁽³¹⁾。

M. T. 氏は「設立経過報告」の中で、つぎのように述べている。

「昔からの伝統を受け継いできた小沢田部落小沢田若勢団が、時代の移り変わりにより自然消滅をしてしまい、部落の伝統行事の普及・保存もなく消え去ってゆく現況であります。この現実をみて、これまであった小沢田部落の伝統行事（万灯火、盆踊り、鳥追い、祭典行事等）を一つでも受け継ごうと、今年、部落を愛する勇士が春の祭典行事において俵神輿をかつぎ、祭典をより以上に盛り上げた。この盛り上がりを経験し一本化を図り、伝統行事の普及・保存と会員相互の親睦・融和に努め、社会の健全なる進展に寄与することを目的として、かねてから準備中のところでありましたが、設立計画をいたしました。（以下略）」

こうして「小沢田若勢団」は発足した。会員は45歳までの男性で、小沢田部落内に居住する社会人であった。こうした年齢上のスパンは、若い人に一人でも多く参加して欲しいという思いと、青年の減少化した中で壮年集団が中心とならなければという決意の双方を考慮した結果である。青年会でもなく壮年会でもない。それは青壮年か

らなることが期待されたので、人々に馴染みのある「小沢田若勢団」と名づけられた。

設立当初、会員数は71名、現在は57名である。会の組織は、会長1名、副会長2名、理事8名、監事2名、事務局2名、および一般会員から構成されている。なお理事については、一人が事務局長で、残りの七人は、七ブロックに分けた地区の連絡係を兼ねていた。

小沢田若勢団は、その中心メンバーが部落に定着した壮年層であるから、一時的にせよ、その存続と活動には安定したものが期待できた。

③ 新小沢田若勢団の活動

「小沢田若勢団通常総会議案」（昭和59年2月5日）によると、行事の種類も安定化してきている。昭和58年度の事業報告と同59年度の事業計画を参考にすれば、行事は大別してつぎの四つに分けられる⁽³²⁾。

第一は、鳥追い、万灯火、七夕などの子どもを主体とした伝統行事への協力である。若勢団は、材料の準備、つくり方の指導などをする。中学生や高校生の参加を得られない状況の中で、若勢団は伝統行事の保存・普及に協力している。

第二は、若勢団主体の行事への参加。これは七倉神社春季祭典の俵神輿かつぎなどである。

第三は、レクリエーション的行事の主催やそれへの参加。紅白野球大会、お盆球技大会、カラオケ大会、ビア・パーティなどが、それである。会員相互の親睦会でもあり、地域住民の交流機会ともなっている。

第四は、部落や壮和会との座談会などへの参加である。部落との座談会は、部落の役員と若勢団のメンバーが集まり、相互が部落内のことで分からない点を尋ねたり、若者の考えを述べる会である。たとえば「部落有財産について分からないので、あちらこちらにある山林牧野に案内してもらったこともある。」という。かつての若勢団は部落有林野を実際に監督したが、今では山林牧野（共有財産）の整備と管理は部落の仕事となり、若い人達は部落有地の場所、部落有地と私有地の境界についても分からないからである。

壮和会との座談会は、若勢団OBと若勢団の現役との交流会である（若勢団のOB会は、60歳までの人がつくっているもので、壮和会という）。

以上からすれば、小沢田若勢団は、部落内の世代間交流の要になっている。伝統行事への協力を通して子どもやその親と、若勢団主体の行事では青壮年の若勢同士で、部落や壮和会との座談会を通して年輩者などと、それぞれに交流していける立場にあるのが若勢団である。さらに若勢団主催のレクリエーション行事は、地域の人々の総合的交流を可能にしている。

このように壮年層を中核に再組織された小沢田若勢団は、部落の維持・存続への危機感から誕生し、いま部落の年齢集団の一環として自己の社会的位置と役割を再認識

伝統的青年集団の再編

し、地域社会の活性化を目指しているといつてよい。われわれは、小沢田部落の世代間交流の要となりつつある新生若勢団の中に、伝統的青年集団の再編の一形態を見ることができる。

6. おわりに

本稿では、同族結合を母体とした山間のムラ、小沢田部落に見られた青壮年型「若者組」の再編過程について究明してきた。その結論として、つぎの五点を指摘できる。

(1) 村落の階層分化は、若者組の組織を分化させたり、再統合させた。大地主が形成される過程で、小沢田若勢団は地主層の長男からなる青年会第一部と小作層の子弟からなる同第二部に分化した。また没落した地主層の息子が第一部に混じるにつれて、第一部は第二部を指導できなくなり、双方は再び統合され、大地主の君臨する部落組織の支配下に置かれた。

(2) 明治20年代の末から上小阿仁村でも、青年の修養や風紀改善を目指し、青年会や校友会が三学区に組織されていく。そしてさらに大正5年には、全村を単位とする上小阿仁村青年団が組織され、小沢田にも支部ができた。しかし、従来と同様、部落単位の伝統的青年集団と部落の枠を越えた官製の青年団は並存重複の関係にあった。青年団の場合、加入資格年齢が25歳以下であったし、活動の種類も伝統的青年集団とは異なっていたからである。二重忠誠を強いられた青年は、官製の青年団よりもむしろ伝統的青年集団の集会や活動によく参加した。

(3) 小沢田の伝統的青年集団は、大地主が支配する村落の社会構造に組み入れられていたから、地主制の解体は若勢団の立場を曖昧にし、その消滅をはやめた。それに拍車をかけたのが、高度経済成長期の青年の村外流出、在村青年のサラリーマン化、および近代的青年集団の簇生である。

(4) 過疎化の過程で戦後生まれの青年学級や青年会の活動も停滞し、伝統行事も廃れつつあった。部落の未来に危機を感じた壮年層が中心となり、小沢田若勢団を再生させた。新小沢田若勢団は、かつての若勢団と同様、青壮年集団であるが、以前のような労働奉仕ではなく、伝統文化の継承と住民の世代間交流による地域づくりを目指している。

(5) いずれの時代においても、社会の存続は世代間の交流なくしては不可能である。過疎社会に再生した小沢田若勢団は、世代間交流の要となる青壮年集団の在り方に、一つのモデルを提供するものといつてよい。青年に期待しにくい地域社会にあつては、とくに壮年層の果たす役割の重要性について、再認識する必要がある。

<注>

(1) 福武直の分類によれば、村落に見られた社会集団は大別して三つある。第一は、

年齢集団や氏子集団のように村落を単位に形成されてきた「伝統的社会集団」。第二は、青年団や婦人会のように明治末期から町村を単位に形成された「官製特殊機能集団」。そして第三は、成員が自発的に形成し参加する「近代特殊機能集団」である（福武直『福武直著作集』第8巻，東京大学出版会，1976年，113～138頁）。

本研究で使用する伝統的青年集団とは、福武直に依拠すれば、「伝統的社会集団」に属す男子年齢集団の一環をなす「若者組」ないしその末裔を指す。したがって、それは青年団のような「官製特殊機能集団」とも異なるし、グループやサークルなどのような「近代特殊機能集団」とも違う。

- (2) 下村虎六郎編『若者制度の研究』大日本聯合青年團，1936年，31～63頁。中山太郎『日本若者史』日文社，1956年，5～23頁。
- (3) 佐藤守『近代日本青年集団史研究』御茶の水書房，1970年，6頁。
- (4) 教育社会学をはじめ，諸分野でなされてきた若者組の調査研究史をコンパクトにまとめたものとして，つぎのものが参考になる。天野武『若者組の研究』柏書房，1978年，5～22頁，522～542頁。
- (5) 竹内は戦前から年序組織に関心を寄せていた（竹内利美『信州東筑摩郡本郷村に於ける子供の集團生活』アチック・ミュージアム，1941年，178～230頁）。その後，昭和30年頃から東北地方の年序組織の実証的研究に入った。その最初のモノグラフが，竹内利美・江馬成也・藤木三千人「東北村落と年序組織」『研究年報』VII，東北大学教育学部，1959年，63～172頁である。後にこのモノグラフを中心に整理した論文が，竹内利美「東北村落と年序集団体系」『東北文化研究室紀要』第8集，1966年，57～69頁である。

研究の動機は，従来の民俗研究分野における若者組研究が東北地方を研究対象から外してきたことへの疑問である。竹内は，その原因をつぎのように指摘する。従来の研究は，「寝宿」慣行とそれに随伴する婚姻統制の機能に関心を置いたため，「寝宿」慣行や未婚青年だけの集団の見られない東北地方が考察の外に置かれたのではないかと。竹内は，このような問題点を，中山太郎『日本若者史』（春陽堂，1930年）や有賀喜左衛門『日本婚姻史論』（日光書院，1948年）の研究から感じたわけである。そして，さらにつぎのような指摘をしている。

「着実な現地調査研究をぬきにして，若者組ないし年齢集団は，東北地方では未発達であったという見解が，すでに一般の通念とさえなったようにみえる。」

こうした問題意識から，主に宮城県や青森県にみられた年序組織について現地調査を展開して行った。

なお，竹内と江馬の研究には，つぎのようなものもある。竹内利美編『下北の村落社会』未来社，1968年所収論文，江馬成也「山村社会の変容と若者組織」『村落社会研究』第7集，塙書房，1971年，71～108頁。

- (6) 矢野グループの研究も昭和30年頃に開始された。その研究成果が，『比較教育文化研究施設紀要』第11号，九州大学教育学部附属比較教育文化研究施設，1963年である。

佐賀県内の某河川沿いの山間部村落と平坦部村落に調査地を設定し，比較研究を試みている。その中で，「青年組」と称する伝統的青年集団の果たす教育機能が，年齢階梯組織の変容過程に即して究明されている。また「青年組」の活動が衰退するにつれ，青年団および小集団の活動が活性化していく過程も実証的に究明されている。そして「部落改革型」の青年は，部落の枠を越えた青年集団参加者に多いと指摘している。

伝統的青年集団の再編

なお、この研究を踏まえ、同一の山間部村落を昭和49年に再調査した研究がある。池田寛「村落構造と若者組の教育構造」『教育学研究』第47巻 第1号、1980年、20～29頁が、それである。

- (7) 佐藤守の研究は、昭和35年頃にスタートした。佐藤は全国各地（東北・北陸，東海，西南の三地方）の村落を調査した。そして伝統的青年集団の変容過程（若者組の解体やその青年団への再編過程）を，それぞれの村落における内的特殊条件とナショナルなレベルにおける制度的改革，ないしは経済変動といった外的一般的諸条件との交錯のもとで究明した。そして若者組が青年団に再編成され，更にそれがサークル化してくる変容過程を，日本青年集団の近代化過程ととらえている。『近代日本青年集団史研究』御茶の水書房，1970年は，以上の研究成果を23の事例に即してまとめたものである。
- (8) 佐藤守・保田正毅・新井真人『「伝統的青年集団の研究」面接記録』秋田大学教育学部教育学研究室，1986年参照。
- (9) 上小阿仁村郷土史編さん委員会編『上小阿仁村郷土史 資料編第一集』上小阿仁村教育委員会，1975年，42～43頁。
- (10) 上小阿仁村郷土史編さん委員会編『上小阿仁村郷土史 資料編第二集』上小阿仁村教育委員会，1975年，84～85頁。
- (11) しかし，小沢田では，明治になって大地主が出現する。宮本は，その出現のプロセスについても考察している。注(13)を参照。
- (12) 祐川輝夫編『昭和54年度調査報告 上小阿仁乃民俗—秋田県北秋田郡 上小阿仁村—』東洋大学民俗研究会，1979年，357頁。鈴木萬次郎『村史断片』上小阿仁新聞社，1980年，348頁。
- (13) 林野庁『昭和30年度 山村経済実態調査—森林組合篇第9号—』（秋田県北秋田郡上小阿仁森林組合）1956年，18～19頁，22～24頁。
ちなみに田中吉五郎（1854～1925）は，明治16年に小沢田外六カ村の戸長となり，明治22年に初代上小阿仁村村長となる。以後，明治30年，39年，43年，大正11年と村長に選出されている。その息子田中元久も昭和14年に村長となった。
- (14) 「明治33年調制 小沢田部落規程抄録」および「明治41年制定 小沢田部落維持規則」を参照（佐藤・保田・新井『前掲書』79，81頁）。
- (15) 佐藤・保田・新井『前掲書』26，51頁。祐川輝夫編『前掲書』92～95頁。
- (16) 鈴木兵蔵『上小阿仁村の郷土史』（上小阿仁村立図書館蔵），1918年，16～17頁。
ちなみに秋田県では，明治40年に「青年団体規約準則」が制定され，「青年団体ノ設置若クハ改造」が奨励されていく。そして明治42年当時，秋田県内には，校友会，青年団などが，172存在した（秋田県教育委員会編『秋田県教育史』第二巻 資料編二，第一法規，1982年，954～958頁）。
- (17) 佐藤・保田・新井『前掲書』28頁。
- (18) この要項には，青年団について次の事項が詳細に示されている。目的，組織，区域，指導者，事業，補習教育，集会，事務，維持，他の団体との連絡，監督などが，それである（秋田県教育委員会編『秋田県教育史』第三巻 資料編三，第一法規，1983年，965～967頁）。
- (19) 文部省『全国青年団の実際』文部省普通學務局，1921年，31頁。
- (20) 青年団のモデルは西南日本の青年型「若者組」にあったから，東北地方の場合，青年団は青壮年型「若者組」と並存重複し，その活動も独自性の乏しい不活発な傾向があったようだ（竹内利美『前掲書』1966年，68頁参照）。

- ⑳ 佐藤守は、伝統的青年集団（若者組）と青年団との関係を、断絶型、並列型、包摂型に分類し、東北・北陸地方の事例においては、並列型、包摂型、包摂・並列型を見ることができると結論している（佐藤守『前掲書』14～15頁，545～546頁）。
- ㉑ 上小阿仁村では、大正7年に、条件つきで部落有財産の村有無償統一がなされ、条件統一地2500町歩，無条件統一地1500町歩が誕生した。条件統一地の地上権は，各部落にあった。
- ㉒ 佐藤・保田・新井『前掲書』27頁。
- ㉓ 祐川輝夫編『前掲書』92～95頁。
- ㉔ 林野庁『前掲書』135，137頁。
- ㉕ 祐川輝夫編『前掲書』258頁。
- ㉖ 昭和20年代末～同30年代初めは，町村合併により新行政区域に基づく市町村青年会の再編成の時期でもあった。
- ㉗ 「秋田の青年」No.8，秋田県連合青年会，1962年10月。
- ㉘ 「秋田の青年」No.33，秋田県連合青年会，1964年8月。
- ㉙ 祐川輝夫編『前掲書』353～354頁，366～367頁。
- ㉚ 秋田県では県連合青年会が中心となり，昭和48年から「ふるさと運動」を展開した。そして同年の県連青定期大会で，小沢田代表のK. I. 氏（27歳）も常任理事になった（「秋田の青年」No.105，秋田県連合青年会，1973年6月）。
- ㉛ 以下，行事の詳細は，佐藤・保田・新井『前掲書』72～76頁を参照。

〔付記〕 本研究は，昭和59，60両年度にわたる文部省科学研究費補助金（一般研究B）「東北地方における伝統的青年集団の実証的研究」（研究課題番号59450032，研究代表者・秋田大学教育学部教授・佐藤 守）の一環をなす。面接調査，史料の収集などをはじめ，佐藤 守教授の御指導を頂いた。記して深甚なる感謝を申し上げます。